アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl."by The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）

目次　contents

コンビニエンスストアに関する良かったこと調査報告
（森川美和）　2

ADシンポジウム2015　開催報告
～ISO/IECガイド71改訂！～　4

みんなの力でバリアフリー展に出展（中島巌）　5

「みんなにうれしいカタチ展」のご報告（山﨑丹）　6

「在宅医療に適したスターターセットの構築を目指した
在宅用医療機器の開発」報告（山中克裕）　8

随想「私と共用品」第73回
障害のあるパートナーとともに（藤村美織）　10

＜キーワードで考える共用品講座＞　第86講
「社会の要請と共用品（その４：企業統治の大転換）」
（後藤芳一）　11

＜事務局長だより＞
２つの線、万屋（よろずや）と専門店の関係（星川安之）
共用品通信
奥付　12

共用品推進機構
The Accessible Design Foundation of Japan
ADFJ

No.96
2015（平成27）年5月25日

コンビニエンスストアに関する良かったこと調査報告

一昨年度から本格的に始めた「良かったこと調査」。一昨年度のテーマは「旅行」で、昨年度は「コンビニエンスストア」。このコンビニエンスストアに関する良かったこと調査は、“人と人、人と製品やサービス”とが関わる中で生じる「良いこと」を回答者から伺った。本誌では調査報告書の一部をご紹介したい。

～調 査 概 要～

一昨年度テーマの「旅行」の結果は、関係機関（交通機関、宿泊施設《旅館・ホテル》、レストラン・食事処）でも広く活用されており、良かったことの結果が人的配慮の向上や設備の充実につながることが期待されるところである。

昨年度のテーマは「コンビニエンスストア」とした。「コンビニエンスストア」をテーマとして選んだ理由は、弊機構が1993年と2010年に行った「目の不自由な人たちの日常生活における不便さ調査」の結果にある。1993年の調査では、お店の中でコンビニエンスストアは利用しづらいとの回答が多かったが、2010年の調査においては、利用しやすいと回答した人数が増えている。しかし、その理由については明らかになっていないため、今回「良かったこと調査」で「利用しやすい点」を明らかにした。調査結果は、積極的に意図的に「良いこと」を伸ばすことにもつながると思われる。

さらに他の障害がある人達にとっても、コンビニエンスストアは身近であり、買い物がしやすいとの声が聞かれたり、高齢者においては自宅までの宅配等を行ってくれるため利用しやすい点も挙がったりしている。

しかしどの点が良く、どの点が利用しやすいと思っているのか等の具体的な事例は収集されていないため、調査を行い、コンビニエンスストア各社等で広く活用してもらえるよう報告書としてまとめた。

～調 査 方 法～

自由記入が多いアンケート調査形式。自由記述形式とした理由は、調査実施者の想像を超えた事項を知るためである。調査実施に関しては、以下の団体等に協力を頂いた。

ア．（社福）日本盲人会連合
イ．（社福）日本点字図書館
ウ．（一財）全日本ろうあ連盟
エ．（公社）全日本リウマチ友の会
オ．（社福）全国盲ろう者協会
カ．（公社）全国脊髄損傷者連合会
キ．（社福）国際視覚障害者援護協会
ク．NTTクラルティ（株）
ケ．（株）高齢社
コ．（一社）全日本難聴者・中途失聴者団体連合会
サ．（一社）全国パーキンソン病友の会
シ．あすなろ会（若年性関節リウマチの子供を持つ親の会）
ス．（一社）日本パラリンピアンズ協会
セ．その他弱視者有志

～回答者属性～

アンケート回答者数は428名であった。

「視覚障害（盲）」73名（うち１名は「難病その他」との重複障害、うち１名は「上両肢障害・言語障害・難病」との重複障害、うち１名は「難聴」との重複障害）
「視覚障害（弱視）」41名（うち２名は「下肢障害」との重複障害、うち１名は「難聴・うつ病」との重複障害）
「聴覚障害（ろう）」69名（うち４名は「言語障害」との重複障害）
「聴覚障害（難聴）」23名（うち１名「上下肢障害」との重複障害）
「盲ろう」10名
「肢体不自由（上肢障害）」１名
「肢体不自由（下肢障害）」47名
「肢体不自由（上下肢障害）」23名（うち１名は「高次脳機能障害」との重複障害、うち１名は「腎障害」との重複障害）
「言語障害」２名（うち１名は「脳性まひ」との重複障害）
「難病（リウマチ）」41名（うち12名が「上下肢機能障害」、うち４名が「下肢機能障害」）

「難病（パーキンソン病）」54名（うち４名が「上下肢障害」との重複障害、うち３名が「下肢障害」との重複障害、うち１名が「上下肢障害・言語障害」との重複障害、うち１名が「難聴」との重複障害）
「難病（その他）」２名
「高齢者60歳以上（国連の定義による）」37名
「その他」５名（うち１名は「重症筋無力症」、うち１名は「精神（気分障害）」）

～良かった人的応対～

【（出）入り口での誘導（ドア）】

・私がドアのそばの入口付近で迷っているときに、お客さんや通行人が入口のドアを開けて声をかけてくれる。（盲）
・私が買い物を終えてお店を出ようとする時に店員さんがドアを開けてくれるので助かります。（盲ろう）
・いつも利用するコンビニで、車いすで入店すると入口のドアを素早く開けて頂くところが、何店かありますのでありがたく思っております。（下肢障害）
・杖を使用していると時にドア開けていただいた。（リウマチ）

【（出）入り口での声掛け（対応）】

・どのコンビニでも、店員さんが必ず「いらっしゃいませ」と声をかけてくれるので、レジがどのあたりか、店員さんがどのあたりにいるのかがわかってとても安心。お店にとっては当たり前かもしれないけれど、この声掛けはすごく助かる。（弱視）
・笑顔であいさつ、うなずき。（ろう）
・私がレジを探している時に、店員が私の手をとって誘導してくれるので助かります。（盲ろう）
・雨の日などは必ず店員さんが、床がすべるので気をつけるようにと気にかけてくれる。（リウマチ）
・店員がいらっしゃいと声をかけてくれるので気持ちがいい。（高齢者）

【店内での誘導】

・10年ほど前に頻繁（ひんぱん）に利用していたコンビニエンスストアで、初めての店員に援助依頼を伝えたところ、「どのようにしたらいいですか？知らないので教えてください」と言って真摯（しんし）に対応してくれたこと。（盲）
・盲導犬と一緒に勝手に散策し、見つからなかった商品だけレジで伝えて探しに行ってもらっています。（弱視）
・顔をおぼえてくれているので、簡単な手話を使ってくれる。（ろう）
・お客様がどんなものを購入したいか、十分時間を取って下さるのはありがたいです・・・焦らせない。（下肢障害）

【店内での説明（商品棚）】

・たまに手の届かない場所がある場合は声をかけるとすぐ来てくれる。（下肢障害）

【レジでの支払い・応対】

・レジの店員の方が、お釣りを渡す際に区別がしづらい5000円札と1000円札を別々に渡してくださり、紙幣の整理がしやすかった。（盲）
・アルコール飲料購入などの際、確認ボタンを押す必要があるのだが、気を利かせて、さっと店員さんが押してくれたり、おつりなどをしまうのをゆっくり待ってくださって、商品の入った袋を手渡してくれたりする店舗がある。（弱視）
・お金を払うのにモタモタしていても「急がなくても大丈夫ですよ」と笑顔で待ってくれる。（パーキンソン）
・ゆっくりでいいですよと声をかけて頂いた。（パーキンソン）
・耳が聞こえないと伝える前に店員の方から耳が聞こえない人だろうと気付いてくれて、メモに書いてくれたり、身振りで伝えてくれたりするとき、こっちの手間が省けて助かります。（ろう）
・支払いが終わった後に「ありがとう」という手話を使ってくれた。（ろう）

調査結果が、2020年に開催される「東京オリピック・パラリンピック」までの５年間、そしてオリンピック・パラリンピック開催後の我が国が、世界に誇れる人的応対及び、充実した製品や設備を提供していくための手掛かりとなり、少しでも皆様のお役にたてれば幸いである。

また、このような貴重な調査を実施する機会を下さった一般財団法人日本児童教育振興財団には心より感謝を申し上げる。　**（森川美和（もりかわみわ））**

良かった事調査の結果は以下のWebページで公開している。
http://www.kyoyohin.org/ja/research/report_goodthings.php

ADシンポジウム2015　開催報告
～ISO/IECガイド71改訂！～

異なる業界団体が集まりアクセシブルデザイン（AD）・福祉用具関連の調査、開発、標準化、普及、国際化等の事業について情報共有を行っているアクセシブルデザイン推進協議会では毎年社会情勢に合わせテーマを決め、シンポジウムを行っている。昨年度は、ISO/IECガイド71（Guide for addressing accessibility in standards《規格におけるアクセシビリティ配慮のためのガイド》）改訂に伴い、超高齢社会に求められるモノ作りとは？～多様な身体特性に配慮した安全・安心を考える～と題して開催した。当日は約150名の参加者があり、フリーディスカッションも行われた。

【基 調 講 演】

基調講演は、跡見学園女子大学の宮崎正浩教授に「改訂版ISO/IECガイド71の概要報告」と題し、ガイド71の改訂経緯、アクセシビリティやアクセシブルデザインの定義や活用方法について、続いて(独)産業技術総合研究所（現：国立研究開発法人）の佐川賢名誉リサーチャーから「多様な身体特性のある高齢者や障害のある人の特徴を知る」というテーマで講演をいただいた。

参加者からは、「ISO/IECガイド71改訂の事が良く理解できた」、「ISO/IEC Guide71の大幅改定を受けて、タイムリーな内容でした」、「アクセシブルデザインという概念に興味があり、参加いたしました。新たな製品開発を行うにあたり、ガイド71のような指標があることは初めて知り、改めて拝見させていただきたく存じます」、「専門的な内容を、わかりやすく説明され、たいへん良かったです」、「データの重要性を分かりやすくご説明頂き、大変勉強になりました。今後の取り組み（点字、触知図の研究・開発・普及）に活かしていきたいと思います」等の感想が寄せられた。

【講　　演】

講演では、企業や業界団体からそれぞれの取組みについて報告を頂いた。

最初に、パナソニック(株)アプライアンスデザインセンターUDチームの中尾洋子チームリーダに「高齢社会に向けた家電製品での取り組み」について、続けて、(一社)日本ガス石油機器工業会障がい者対応設計委員会前田純一委員長に「ガス石油機器における現状の取組みと安全・安心のポイント」についてお話を頂いた。最後に、大和ハウス工業(株)ヒューマン・ケア事業部部長/ロボット事業推進室室長医療・介護支援室担当の田中一正氏に「超高齢社会における未来型ハウス」についてご紹介を頂いた。

（写真：ADシンポジウム会場風景）

参加者からは、「家電、ガス機器等住宅設備の安心安全な高齢者等への取り組みが理解出来た。またロボットとの共生が予想以上に進んでいると感じた。また、いろいろな講演とは別にアクセシブルデザインの製品等についての紹介をしてもらえるとAD製品がより身近なものになるのではないかと思う」、「具体的製品の説明があり分かりやすかった。ガス機器のユニバーサル化の使い安さを感じた。高齢者社会に対する対応が分かりやすく為になった」、「各企業が共用品としてどのような視点をもって製品開発に臨んでいるか、普段当り前に使っている機器に施された機微な工夫を理解することができ、大変有意義でありました」とのご意見を頂いた。

今年度も、参加して下さる方のニーズに合ったシンポジウムが展開できるよう努めたい。

（森川美和）

みんなの力でバリアフリー展に出展

共用品研究会関西　事務局　中島 巌（なかじま いわお）

「バリアフリー2015」は４月16日から18日まで「インテックス大阪」にて開催された。（入場者数は、95,012人）当会は一昨年から主催者との共催によるテーマコーナーとして参加しており、今回は「ユニバーサルデザイン『身につけるモノ』コーナー」という名称で出展した。まず、今回の展示の概要を紹介しよう。

「身につけるモノ」に関して、様々な人の生活上の不便を取り上げ、それらをどのように解決すればいいのか、その方向性について当会としての考えをパネルで披露した。そして、ユニバーサルデザイン（UD）の考えで開発された商品の事例を集め紹介した。留めやすいボタン、磁石式のボタン、簡単に装着できるネクタイ、片手で巻けるマフラー、伸縮しどこでも留められるベルト、片手でヒモを締めつけられる靴などが主なものである。さらに、ユニバーサルファッション協会に参加を求め、その活動内容のパネル展示と研究開発商品のポロシャツを展示した。また、(株)ツインズ・コーポレーションの「誰でも簡単に着れる和服」を紹介し、来訪者に試着してもらった。また今回初めて、ワークショップ会場で当会副会長の庄田洋一（しょうだ よういち）氏が「高齢者の自立生活を支えるユニバーサルデザイン」と題して講演を行った。

今回の準備に当たって、「身につけるモノ」のUDのあり方を例会で討議した。１つのモノを色々な人が使用する場合は、あらゆる人々への対応が必要であるが、「身につけるモノ」は個人使用なので、品揃えで対応することも可能であることを確認しあった。またファッションでは、その人用に「あつらえる」ということが行われているが、この取り組みはUDと言えるのかどうかについても話し合った。安価で誰でもあつらえることができるのであれば、UDの範疇に入るのではとの判断をしたが、共用品の概念からするとどうなのか、今後の議論が必要かもしれない。

今回のバリアフリー展では、ユニバーサルデザインという言葉が見られるブースが少しではあるが増えたことはうれしいことである。福祉機器や介護用品の取り組みが成熟期を迎え、福祉機器や介護用品のメーカーが次のステップとして、共用品やユニバーサルデザインの必要性を感じるところが出てきたことを意味しているのではと想像している。

今回の運営に当たって、各会員が積極的に参加し、みんなの力でやり遂げることができたことは、我々の誇りであると思っている。

（写真：「身に着けるものモノ」コーナー）

「みんなにうれしいカタチ展」のご報告

凸版印刷株式会社　山﨑 丹（やまざき もえる）

2015年３月３日から５月24日まで印刷博物館のP&Pギャラリーで開催しました、「みんなにうれしいカタチ展」のご報告をさせていただきます。

本展示会の企画に際しましては、共用品推進機構様に多大なご協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

（写真：みんなにうれしいカタチ展入口）

■展示会のタイトルとコンセプトについて

ユニバーサルデザイン（以下UD）という言葉が日本で使われ出して15年ほどになりますが、ともすればバリアフリーに近い、本来のUDよりも狭い意味で使われることが多かったようです。

今回の展示会では、UDをより広い意味で捉え、特定の人のためのモノではなく、みんなのためのモノなのだという事をお伝えするために「みんなにうれしいカタチ展」というタイトルにしました。

今回の展示会は「見て・触って・感じる」をコンセプトにしており、多くの製品を手に取れるように展示しました。“体感”を意識して企画した各コーナーをご紹介します。

■みんなにうれしいってどういうこと？

最初のコーナーは、みんなにうれしいってどういうことかを探るコーナーです。今回の展示会に協力してくださった企業や団体の方々に「UDとは何か？」という問いかけを行い、その問いに対する答えを展示しました。多様な表現がありますが「みんなにうれしい＝UD」という考えが根底にあるように感じました。

■みんなの“こまった”を感じてみよう

続いては色々な方が困っている状況を体験していただくコーナーです。「みんなのいつも」ではないかもしれないけれど「みんなのいつか」であることをご理解いただきたいと考え、企画しました。

最初の「見え方のこまった」は真っ白な雑誌やお菓子、パンなどの商品を展示した真っ白な部屋です。一般的に人が得る情報の８割は視覚情報と言われています。その視覚情報がゼロではなくてもある程度限定されると、困った状態になるという体験です。目が不自由でなくても、明るい部屋から急に暗い部屋に入った時や、メ

（写真：「見え方のこまった」の真っ白い部屋）

ガネを無くした時などは同じような状況になることもありえます。

次は「言葉のこまった」です。我々が海外に行く、外国人観光客が日本に来る、そういった際に言葉の壁の問題があります。ここでは「こんにちは」を29の言語で表記しました。挨拶の言葉でしたらまだ良いですが、「非常口」という言葉や「取扱いの注意事項」などを表す言葉が分からないと、大変こまったことになります。また、点字や手話が出来る方も限られていますし、世界共通ではありません。

続いて「右と左のこまった」です。右利き用、左利き用、両きき用の商品を展示しました。例えば右利きの場合、スクリュータイプのワインオープナーは時計回りにコルクにねじ込みます。でも左利きの場合は逆にねじ込むので、左利き用が用意されています。その他扇子や鉛筆削り、トランプなど左利き用や両きき用が用意されている商品もあります。多くの製品が両きき用になると、みんなにうれしい状況になります。

最後に「大きさのこまった」です。テーブルやイス、ドアを通常の1.5倍の大きさで製作し、小さなお子さんからの見え方を再現しました。イスは高くて座るのが大変ですし、ドアノブの位置も高く、サイズも大きいので開けるのが大変です。

■ユニバーサルデザイン基礎知識

このコーナーではUDの基礎知識として、UDの定義や主なあゆみ、共用品やダイバーシティなどUDと想いをひとつにする言葉たちを紹介しました。

■みんなにうれしいカタチ

こちらは色々な企業や団体が製作しているUDに配慮した製品を紹介するコーナーです。「みんなで使える」「安心して使える」「選べる」「私に合わせる」「いつもともしも」の５つの切り口で、約40点の製品を展示しました。

（写真：UDに配慮した製品コーナー）

■みらいにうれしいカタチ

最後のコーナーでは「外国人が過ごしやすい社会へ」などこれから高まるニーズと、「世界中の誰もがどの国に行っても困らない共通言語ピクトグラム」など期待される技術を事例に、見学者に少し先の未来について考えていただきました。

■最後に

日本は今、超高齢社会、少子化、防災・減災など様々な問題に、世界に先駆けて直面している「問題先進国」です。ですが、逆境こそがチャンスです。これらの課題を解決し、いずれ同じ課題を抱える世界の国々に提供することで、「問題先進国」から「ソリューション先進国」へ変貌することが出来ると思います。そのキーワードの一つが、UDなのではないかと我々は考えています。

平成26年度医工連携事業化推進事業
「在宅医療に適したスターターセットの構築を目指した在宅用医療機器の開発」報告

日本医療研究開発機構（AMED）「医工連携事業化推進事業　事務局
株式会社三和製作所　事業推進室室長　山中克裕（やまなかかつひろ）

10年後の2025年、それは団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる年でもあります。2025年以降、2,200万人、約４人に１人が75歳以上という超高齢社会が到来します。これまで国を支えてきた団塊の世代が給付を受ける側に回るため、医療、介護、福祉サービスへの需要が今まで以上に高まり、社会保障財政のバランスが崩れるとも指摘されています。

日本は、既に世界一の高齢者先進国となり、病院における入院希望者数は病床数を遥かに超え、在院日数は短縮化されてきています。今後より一層の短縮傾向が予測されるため、病院から在宅へのスムーズな移行措置が求められています。

私たちが実施している「医工連携」事業とは、その名のとおり医療現場と工業技術との連携による医療機器開発であり、複数の団体から成るコンソーシアム（共同体）によって構成されています。私たちのコンソーシアムでは、３つの在宅用医療機器の開発を担っています。「簡便に安心して扱える輸液ポンプ」、「安全に清潔に扱える輸液セット」、「痩せてわきの下が空いている人にフィットする体温計」のそれぞれの一次試作機開発を平成26年度は実施いたしました。これら３つの機器を選んだ理由としては、平成25年度看工連携推進事業にて実施された調査による、様々な疾患に共通し、在宅での必要性が多く指摘された機器であったことによります。

各機器の開発を担う企業とともに、私たちは「病院」ではなく、「在宅」にて機器を取り扱う機会が多い訪問看護師の皆様を主に、不便さを感じる機器について調査を実施しました。まずは、200名の訪問看護師の方へヒアリング調査を実施し、数多くのアイテム群（医療機器・非医療機器等）の中から、不便さを感じる機器に関する意見を集めました。その後、公益財団法人日本訪問看護財団のご協力のもと全国2,000ヶ所の訪問看護ステーションへアンケートを送付しました。結果、合計でなんと800名以上の訪問看護師の方々による現場の貴重な声を得ることができたと同時に、医療機器はより在宅仕様であるべきだという点が明確となりました。

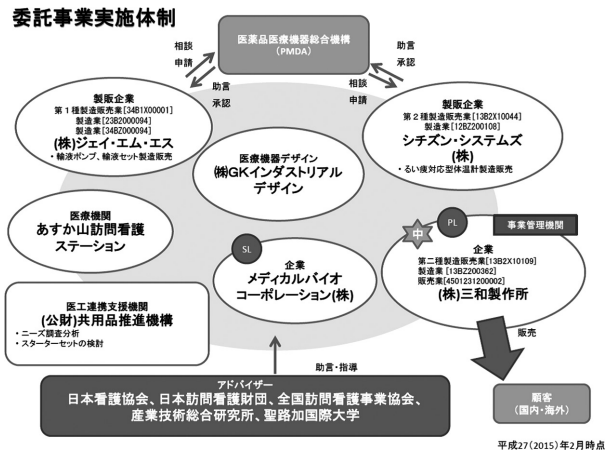
なお、これらの試作機開発と貴重な調査実施と並行する形で、３つの関係機関（公益社団法人日本看護協会、公益財団法人日本訪問看護財団、一般社団法人全国訪問看護事業協会）ならびに販売までを含めた関係者で構成された委員会を設置しました。合計で５回開催し、協議を行い、開発要件の絞り込みを主に在宅医療のニーズ確認を実施することができました。

また、それぞれの開発機器が共通の在宅仕様となるようデザイン指針案をGKインダストリアルデザインにより検討いただき、公益財団法人共用品推進機構によるアクセシブルデザインの視点から「在宅用医療機器」について多くの議論と検討を重ねることができました。

この取り組みは、医療機器等の製造現場と医療現場の間に介在する壁を、業界をあげて取り払う初の試みであると同時に、在宅医療の質の向上と標準化が図られるだけでなく、今後も引

き続き多様な製造企業が参入しやすい仕組みづくりを試みる側面も持ち合わせる点から、社会的にも期待されると思っています。よって同委員会では、専門的な見地から、さらなる協議・検討を行い、在宅医療に適した機器等の構築を目指していきます。

本事業は平成27年度より、医療分野の研究開発及びその環境整備の中核的な役割を担う機関として、これまで文部科学省・厚生労働省・経済産業省に計上されてきた医療分野の研究開発に関する予算を集約し、基礎段階から実用化まで一貫した研究のマネジメントを行う「国立研究開発法人日本医療研究開発機構」に経済産業省より移管されました。本年度は、平成26年度の調査で明らかになった機器等を中心に、訪問看護師に加えて患者家族、医師、薬剤師、ヘルパー等の地域包括ケアシステムに係わる多職種への聞き取り等を実施し、在宅用医療機器等の不便さ及びニーズを多面的に把握していく計画です。また３つの機器の二次試作機開発から最終仕様の検討とともに、在宅医療におけるガイドライン等の作成も視野に入れています。引き続き本事業に邁進（まいしん）し、ご縁により繋がり合ったみなさまと力を合わせ、モノを通じたおもてなしの一助となるよう日本の在宅医療現場へ、そして世界の人々へと発信することができればと思います。



（図　実証事業各企業構成）

（図　事業コンセプト）

（図　医工連携事業化推進事業）

■この調査結果を反映した報告書は「医工連携による医療機器の事業化ポータルサイト（MEDIC）」にてダウンロードすることができます。

http://www.med-device.jp/

■実証事業に関する成果報告書等の掲載ページ

http://www.med-device.jp/html/development/26-128.html

随想 第73回 私と共用品

障害のあるパートナーとともに

ドイツ語翻訳者　藤村美織（ふじむら みおり）

子供のとき、祖父母の家によく出かけた。何かにつけて大勢で集まり、にぎやかで、発見に満ちていた。祖父が病気になったとき、「すいのみ」という便利なものがあることを知った。また小さなプラスチックのピンで、牛乳の蓋が簡単に開けられることを祖母に教わった。私自身のなかで「共用品」に通じるルーツを探ってみると、あのあたりに行き着くような気がする。

30代も半ばになってから、点字に関心をもち、視覚障害者と初めて接するようになった。そんななかで夫と出会い、まずは手引きで、音楽会や芝居に同行するようになる。1998年当時、二人の連絡にはメールが使われ、音声パソコンのお陰で普通に交信できた。彼は携帯電話もすでに持っていた。真ん中の５の点に触れながら、私の前で電話をする姿は、それ以後、今日までお馴染みのものである。

やがて二人で生活するようになったが、白杖を持って一人で出勤するし、国内にいる限り基本的に問題がない。新幹線や飛行機を利用するにしても、あるいは電車の移動だけでも、駅のサービスを頼めば、スムーズに目的地まで一人で行けるからだ。

ところが、ある日、救急車の中から電話がかかったときには驚いた。高田馬場駅のホームから転落して、病院に運ばれる途中だという。幸い電車にひかれず、頭を数針縫った程度ですんだ。その後、ホーム柵ができて本当によかったと思う。

夫は国外にもよく足を延ばすが、その際は私が同行する。「あ、こんなところに変な点字ブロックがある。わかる？」。「見たこともない位大きい、黒のキングプードルが盲人と一緒にこっちにくる！」。そんなおしゃべりをしながら、あちこち歩き回ってきた。でも、うまく説明できないことも多い。見事な日の入りが目の前に現れたとき、私が口にできたのは、「すごい」の一言だけだった。

ふだん夫が趣味で楽しんでいるものとして、電子機器による読書のほか、囲碁がある。私はルールを把握していないため対戦できない。かつてオセロは一緒にやったが、見える私がたちまち負けてしまうので、お互いに面白くなかった。今は詰め碁の本の例題を見て、突起のある碁盤に石を並べておけば、一人で触り、時々ぶつぶつ言いながら、解いていく。

二人で音楽や演劇の鑑賞によく出かけるのは以前と変わらない。特に演劇の場合、視覚障害者といえば、最前列を用意してくれる劇団が多い。セリフの聞きとりはもちろん、役者の息遣いや動きなどがよくわかり、すばらしい配慮だと思う。私自身もすっかり味をしめて、どんなときでも一番前をめざすようになってしまった。

ちなみに、前回は加藤健一（かとうけんいち）事務所の「バカのカベ」、次は猿之助（えんのすけ）と中車（ちゅうしゃ）出演の歌舞伎「あんまと泥棒」、いずれも最前列である。

むろん日常生活は楽しいことばかりではなく、いろいろある。夫婦で年を重ねれば、やがて静かで優雅な日々が来ると思っていたが、とんでもない。せめて身の回りをお気に入りのグッズや「共用品」でかため、暮らしやすさを取り込んでいきたい今日この頃である。

「社会の要請と共用品（その４：企業統治の大転換）」

後藤芳一（ごとうよしかず）（日本福祉大学客員教授、東京大学大学院教授）

企業統治（ガバナンス）のあり方が転換期にある。内向きを廃し**（資本）市場**②④～⑥⑫⑱⑲㉚㉜～㉞㊱㊲㊴㊶㊸㊹㊼～㊿55㊺58㊻㊽～㊺（小さい添え字①～㊺は、同様の用語が本講の第1～85講に既出であることを示す）との対話を求めている。**社会**①⑮⑱㉗㉘㉛㉜㊼㊸～㊻㊽～㊶㊸～㊺要請を意識する姿勢へ変わることで、長期的に**共用品**③⑥⑩⑬⑭⑯～㊲㊵㊷㊹～㊺への取組みを後押ししそうだ。

１．伝統的な基調

日本企業は伝統的に、安定株主の確保や資金調達のため、企業や金融機関で株の持合いを行ってきた（最大で２割近く）。その結果、株主側からの投資効率への要求は低く、物言わぬ株主が多かった。経営者も株主からの要請に対する意識が低かった。

２．基調が変化する兆し

バブル崩壊（1990年代前半から）で投資効率が強く意識されるようになり、時価会計導入（2001年）もあって株の持合い解消が進んだ。その過程で外国人株主の保有が増えた（2014年に初めて３割超に）。アベノミクスによる株価上昇で海外投資家が買い、物言う株主が投資成果を求める傾向が増した。

一連の動きのなか、ROE（＝当期純利益／株主資本×100）が注目されている。ROEは資本コストを意識した収益性、企業へ投資した際の利回りの意味ももつ。米欧企業が15％前後なのに対し、日本では約８％（上場企業）と低い。その一因は株主の要請が経営に反映されにくい、過去にも取組み（例：株主代表訴訟が容易化（1993年）、委員会等設置会社（2003年導入））はあったものの企業統治も十分でないなどが指摘されてきた。

３．政策（成長戦略）①②④⑦⑧⑫⑱㉖～㉘㉚㉜㉙㊵㊶㊹㊺～㊺としてのガバナンス

アベノミクスは企業の稼ぐ力を取り戻すとして、コーポレートガバナンスの強化、国際水準のROE達成等を掲げた（「『日本再興戦略』改訂2014－未来への挑戦－」（2014年６月24日閣議決定））。

経済産業省はこれを受けて「持続的成長への競争力とインセンティブ～企業と投資家の望ましい関係構築～」プロジェクト最終報告書（通称「伊藤レポート」、2014年８月6日）を公表し、資本効率を意識した経営改革、インベストメント・チェーンの全体最適化、企業と投資家双方向の対話を提唱した。

４．企業統治の法律と規範

これらは最近１年で具体化された。金融庁「日本版スチュワードシップ・コードに関する有識者検討会」による「『責任ある機関投資家』の諸原則≪日本版スチュワードシップ・コード≫～投資と対話を通じて企業の持続的成長を促すために～」（2014年２月27日）は、機関投資家に対し対話を通じて企業価値向上や持続的成長を促す責務を示した。報告書が掲げた「コンプライ・オア・エクスプレイン」（原則を守らない場合は説明責任）は、他の指針にも共有された。東京証券取引所は「コーポレートガバナンス・コードの策定に伴う上場制度の整備について」を公表（2015年２月24日）。東証１・２部上場企業に２名以上の社外取締役を置くことを求め、置かない場合は説明を求める。2015年６月１日から適用した。金融庁「コーポレートガバナンス・コードの策定に関する有識者会議」による「コーポレートガバナンス・コード原案～会社の持続的な成長と中長期的な企業価値の向上のために～」（2015年３月５日）は、適切なガバナンスの原則を掲げた。

改正会社法（2015年５月１日施行）は、社外取締役を置かない場合に理由開示義務、監査等委員会設置会社制度の導入（従来の委員会等設置会社は指名委員会等設置会社に）を含む。企業側にも社外取締役の選任やROEを経営指標に加える対応が広がっている。

５．共用品との関係

IRの活発化（1990年代後半から）や、環境報告書がCSR（**環境**㊸～㊺㊼㊷～㊻㊽㊶㊸～㊺・社会）報告書へ（2000年頃）（今はさらに統合報告書へ）の動きも進む。内向き経営から環境と対話する経営へ進み始めた。今後はより積極的に社会の要請を織り込み、社会的存在としての価値を求める経営へ進むと期待される。

2つの線、万屋(よろずや)と専門店の関係

事務局長だより

星川（ほしかわ） 安之（やすゆき）

■2本の線

縦に平行の２つの線を鉛筆で書き、その２つの線を横切る一本の線を右上から左下に斜めに書く。次に、斜めに引いた線が、２本の縦線にはさまれる部分を、消しゴムで消してみる。すると、目の錯覚で斜めの線は、直線に見えなくなる。具体的には右側の線が上に見える。そのため、直線に見えるように新たに左側に線を引くと、その線は実際に直線になる線よりやや上になる。学生時代、この事象を「客観と主観で説明せよ」という課題が、社会学のゼミで出された。

我々学生の答えの多くは、後から引いた線は、実際には直線ではないが直線に見えるという観点から「主観」、そして真ん中を消したことで、直線には見えなくなってしまったが、実際は直線である方を客観的というものであった。中には、逆を唱える学生も数名いた。その議論は１時間近く続けさせられ、その間、そのゼミを担当する指導者は、何も言わずに学生の議論を聞いていた。

議論もつき、答えも煮詰まり始めた時、おもむろにその指導者は、「２つの事実があることを、客観的というのではないか？」と述べた。その場にいわあせた学生にとって、そのコメントは印象に強く残った。あれから35年。このゼミでの１時間半が時々思い出される。

■万屋と専門店

スーパーマーケット、コンビニエンスストアが多くの人に便利さを提供しはじめてから40年以上がたち、今ではすっかり市民の生活に溶け込んでいる。共用品推進機構で、昨年度行った「コンビニに関する良かった調査」でも、数多くの“良かった！”が、それぞれの障害当事者から集まった。

「何でも売っている！」と「！」が付いた昔の万屋（よろずや）がシステム化されたのが、スーパーマーケットやコンビニエンスストアと位置づけると、それとは対照的な存在が、文具、時計、家電、眼鏡、家具、書店、玩具、野菜、魚など、特定の商品を売っている専門店と言われる小売店である。

扱っている商品の分野は限られているが、その限られた分野の中で数多くの種類が並んでいる。専門店は、スーパー、コンビニの台頭で以前に比べ少なくなった気がするが、街を歩いていると今でも新たにオープンした専門店、及び古くからある店を見つけることができる。

今年になって、自由が丘の傘専門店、谷中銀座の靴下専門店を、街をぶらりと歩きながら発見した。サイズの違いだけでなく、「片手で使える・履ける」、「杖にもなる」、「ゴムがゆるくて締め付けられない」など、スーパー、コンビニでは見られない企業が、さまざまなニーズに応えて工夫してできた商品を発見できるのは、専門店ならではのことである。

現代版万屋と、個別の分野に特化した専門店。共通点は、どちらも「共用品」が並ぶ店である。２本の線のように、どちらも客観的に存在し、それぞれに必要な店であり続けてほしいと願う。

共用品通信

【会議】

［3月］

理事会（3日）

第2回AD本委員会（4日）

評議員会（24日）

【外部主催会議】

［3月］

第2回規格委員会（9日）

【講義・講演】

［3月］

荒川区立赤土小学校共用品授業（森川、7日）

［4月］

みんスポ　第3回　共用品とスポーツについて（星川、3日）

おもちゃ図書館、共用品について（星川、24日）

慶応大学　BF・UD入門（星川、28日）

アクセシブルデザインの総合情報誌
インクル 第96号
2015（平成27）年5月25日発行
"Incl." vol.15 no.96
ⓒThe Accessible Design Foundation of Japan
（The Kyoyo-Hin Foundation）, 2015
隔月刊、奇数月に発行
一般頒価　1部1000円
（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD－Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行　（公財）共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F
電　話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人　鴨志田厚子
事務局　星川　安之
森川　美和
金丸　淳子
松岡　光一
田窪　友和
本田　和枝
青山　泰隆
渡邉　道彦
一言　映子

執筆・協力（五十音順）
後藤　芳一
関戸　菜美
中島　巌
中野奈津美
藤村　美織
山崎　丹
山中　克裕

印刷・製本　サンパートナーズ㈱

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。
上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。